

[自然治癒と医療と…]

ドイツのオペラ劇場で歌うようになって、初めてちょっとひどくなり
そんな風邪をひいた。3, 4日後には公演の本番が控えている。
歌い手の仲間に、皆が行く耳鼻咽喉科のお医者様を紹介してもらった。
普段のドイツ語には不自由なかったものの、医療の専門的な単語は、
「ムニムニ…」としかわからなかった。3日経ったらまたいらっしやい
と言われ、2点の長い難しそうな名前を書かれた処方箋を渡されて、
薬局に行った。3日経ったら、ある程度何とか歌えるようになる薬を
出してくれたと思って。

ところが薬局で渡された「薬」の実体は、なんとトローチとうがい薬！
信じられずに、何回も店頭で訊きなおしたが、間違いなし。簡単な
「風邪薬」さえもない。ショックだった。だって、その二つだけで治るとは、
到底思えなかったからだ。それも3日で?!? どうして、どうして?!

3日経った。もちろん治っているはずもない。そうしたら、劇場に提出
する「1週間の病欠」という診断書を渡された。

ヨーロッパの劇場の歌い手は「劇場に勤めている公務員」なので、
公演当日のお昼までにちゃんとした診断書を出せば、キャンセルは全く
問題ない。ダブルキャストになっていない場合も、ほかの劇場から代役
を探し、その分必要になる「ギャラ」は劇場の医療保険で補われる。公演
にはほとんど影響がない。誰も文句は言わない。観客は「私」を聴きに
来るのではなく、作品を観に来るのだ。それに人間が病気になるのは、
当たり前のことだから。

ある時、かなり体力が落ちていたウィーンの義母のため、「栄養点滴」
はどうなの、と医者のお義妹に聞いたら、ものすごく不思議そうな顔をされた。
「病気ではないのだから、ちゃんと休んで食べれば回復するはず」と彼女は
言った。確かに少し時間はかかったが、確かに治った。

そう言えば、40年以上にわたるヨーロッパ生活の中で、病気の治療中や
病後は別として、高齢者が栄養点滴をしている姿を見ることはなかった。
日本で時折見かける、「ちょっと体調が十分でないので、仕事前に点滴
をしてもらう」若い人も、ほとんどあり得ない。そんな時は、「体をよく
休めて整える」よう言われるだけだ。

サプリやビタミン剤、クナイプ博士の薬草類はあっても、「栄養ドリンク」
を売っているのは見たことがない。

ちなみに、「人間ドック」という言葉もないし、普通の人が「自由意志」でそのような総合検診に行くことも、私の周りでは聞いたことがなかった。前述の義妹に尋ねたら、「何のため？ 私はやったことないけど」と言われた…。医師から指示されるか、職業上必要とされる以外に、「『人間ドック』にわざわざ行く人なんかいるの？」いやいや、色々早期発見でしょう、と言いたかったが…。血液検査に行く人は多いのだけれど。

一方、ドイツ語圏では女性はかなり若いころから、定期的に婦人科検診に行く。乳癌検診、いわゆるマンモグラフィーは、25歳くらいから、そして、婦人科には14歳くらいから訪れる女の子が多いそうだ！14歳?!?

それこそ「なんのために？」と思うかもしれないが、避妊用のピルを処方してもらうためだと！

これが普通とされる国で、30歳でまだ一度も婦人科系のお医者様には行ったことがない、と言った私が周囲の皆にどれほど驚かれたか想像してほしい。未来の夫や義母に勧められて、意を決して行った個人診療所のドクター。「よもやま話」や仕事のことなどフランクにおしゃべりしながらの診察で、あっけに取られるくらい気楽に終わった。そうそう、日本での婦人科検診、触診は何でも「カーテン越し」と聞いた。ドイツでもウィーンでも、ごく“普通”に顔を見て世間話をしながらの診察しか知らなかった私はただびっくり。個人的に信頼する、それもいわゆる「かかりつけ医」のひとりでもある先生に診察してもらうのに、カーテンを隔てて話をする?? その先生には出産のお世話になったり、手術してもらう可能性もあるはずだ。その時は絶対「カーテン越し」ではないだろうに！

どこの国でも高齢化が進んでいる。「欧米には寝たきりの老人はいない」というタイトルの本があるが、その本を目にして以来、それまで意識しなかった高齢者の医療状態を、いろいろ思い返してみた。

アメリカについては全く知らないが、ヨーロッパの基本は、「自分で咀嚼嚥下できなくなったら、栄養や水分を外から人工的に与える」ことはしない。もちろん病気の治療には最善を尽くすが、治療が終わったら、食事も含めてのリハビリだ。病気ではないのに自分で食べられなくなってきたら、それは(おそらく)「自然の摂理」と判断される。

医学の発展によって、「生」の可能性がものすごく大きくなった。昔だったら

想像もできないような「治療」で、超未熟児が育ち、高齢者は長生きできる。ただ、その技術や治療法を、高齢者にどのように、どの程度“役立てる”かという考え方は、日本とヨーロッパではずいぶん異なるようだ。

TV番組で扱われた「安楽死」、また映画では「いのちの停車場」や「プラン75」といった、今までどちらかというところを避けられてきたテーマが、公に提起されるようになった。それだけ私たちの社会にとって、“身近”になり必然的になってきた現実があるのだろう。

良かれと思って施す「延命措置」が、時には人間の尊厳に苦しみを与える結果になる場合もあることを、私たちは忘れてはなるまい。もちろん、人にはそれぞれの感情や意見があるし、何をもって最善と言えるのか、誰にもわからない。

ただ、自分も含め、何が“その当人”にとって一番幸せなのか、を常に思い考えながら、共に過ごす日々を見つめていきたい。